

資 料

# 大学の強みを生かした看護と看護学教育に学ぶ 大学間教育研究活動連携研修会

—倉敷・上海・旭川の看護と看護教育をつなぐ—より

Learning about nursing and nursing education that make good uses  
of the university advantages

: From the workshop for learning various educational practices and researches  
between universities in Kurashiki, Shanghai and Asahikawa

中川初恵<sup>1)</sup> 大谷順子<sup>1)</sup> 羽原美奈子<sup>1)</sup> 出村由利子<sup>2)</sup>

Hatsue NAKAGAWA<sup>1)</sup>, Junko OTANI<sup>1)</sup>, Minako HABARA<sup>1)</sup>, Yuriko DEMURA<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>旭川大学保健福祉学部保健看護学科

<sup>2)</sup>元旭川大学短期大学部幼児教育学科

## はじめに

近年、少子高齢化等による都市と地方の人口格差から、こと地方大学においてはあれもこれもという教育環境を整えるより、所属する地域や沿革の強みを生かした独自性が求められている。このことは、文部科学省が若年層の東京一極集中を回避するため、個別大学への支援から全学的に地域を志向する大学群を支援する「地(知)の大学による地方創生推進事業(COC+)」<sup>1)</sup>を勧めていることや、国公私立の設置形態を超え、地域や分野に応じて大学間が相互に連携し、社会の要請に応える取り組みを支援する「大学間連携共同教育推進事業」<sup>2)</sup>を推進していることから伺われる。しかしながら、各大学は、同じ課題を抱えていながらなかなかその改善に着手できなかつたり、停滞していることもある。

平成28年2月23～24日、岡山県倉敷市の川崎医療短期大学において、「大学間教育研究活動連携研修会—倉敷・上海・旭川の看護と看護教育をつなぐ—」が開催された。参加者は話題提供者として、川崎医療短期大学看護科および上海健康医学院からの留学研究生2名の4名、旭川大学保健福祉学部保健看護学科から4名と、川崎医療短期大学看護科教職員他約20名の参加があった。

本研修会は、地方大学の強みに着目し、互いの大学

の現状から、今後の所属機関での看護学教育への活用を目的として開催された。そこで、この研修会の開催経緯と成果および今後の大学間教育研究活動連携研修の展望について報告する。

### 1. 大学間教育研究活動連携研修会開催までの経緯

筆者のうちの1名は、前任が川崎医療短期大学(以下『川崎短大』と略す)であり現任が旭川大学である。前任時に上海健康医学院(以下『上海学院』と略す)の看護教育を通じた国際交流の一端を担っていたことから、川崎短大との情報交換の際には、上海学院の教職員である留学研究生(以下『研究生』と略す)のことを話題にすることがあった。平成27年初夏、前任校を離れて3年が経ち、久しぶりに研究生の成果を聴く機会があれば参加したいと伝えていたところ、川崎短大の登喜主任より「研究生の発表の機会を持ってはどうか」とご提案いただいた。研究生は1年の短期留学のため、日本語のブラッシュアップの機会にしたい意図もあった。

このことをきっかけに、本学教員には川崎短大のことを、川崎短大には本学のことをと、両学の情報交換をするようになった。その中で、両学の取り組みは互いに学び合う要素が多いことに気づき、研究生だけでなく両学の看護教育について学び合う3校合同研修会へと発展した。

## 1) テーマ設定

旭川大学では「地域に根ざし、地域を拓き、地域に開かれた大学」の建学理念に従い、国際看護の学びも地域貢献の視野を広げる点に重きが置かれている。したがって、北海道と面積や気候が類似したデンマークの保健医療福祉制度や支援の実際について、看護学生全員がデンマーク国現地教員を通じて講義や高齢者施設で学ぶカリキュラムがあり、一部の希望学生にはデンマークに直接赴いて国際研修を行っていた。また、他学部では留学生が在籍しており、当科の学生も希望すれば交流会等で留学生と関わる機会がある。しかし、看護学生間や看護教員間での国際交流の機会は少なく、また海外には日本の看護がどう映り、活用されるのか知る機会も少ない。川崎短大は先に述べた研究生と、川崎短大の看護教育課程と全く同じプログラムを同年限で学び卒業する留学生制度があり、今後の本学での看護学生国際交流を考える上でも、アジア圏での看護協力体制を考える上でも意義深いと考えた。

また、北海道は他の都府県と比べて広く、かつ人口減少が進む地域の一つであることから、救急医療体制を整えることが課題である。その対応の一つとして、道内でもドクターヘリが整い始めたところであるが、川崎短大が所蔵する川崎学園は、平成13年に日本で最初にこの制度を導入した川崎医科大学附属病院（以下『川大病院』と略す）を傘下に持つ。受け入れ依頼を待つのではない能動的救急医療は、地域に根ざす看護師を養成する本学として必要な教育視点である。

さらに「地域に開かれた大学」として、蓄積された知をどのように地域住民に還元するかということがある。川崎短大の付近には知の還元機関として、川崎医科大学現代医学教育博物館（以下『医学博物館』と略す）がある。また大学病院では、迅速に地域と連携を取りながら有効なベッドコントロールを看護職によって行っている。これは地域の医療に看護師のマネジメント力が欠かせないことを示している。

以上より、川崎短大の強みを活かして、研究生の研修報告と国際交流の経緯、救急看護に関する講演と、医学博物館と川大病院の視察を研修テーマに取り入れた。

一方、川崎短大は、川崎学園という医療福祉の総合学校法人で、運営と教育のほとんどを傘下関連組織内で運営している。同じ創始者が設立した社会福

祉法人と併せると、看護師養成機関として、大学、短大、専門学院がそろっていることになる。同じ看護師養成機関であるために各校の特色を示すのが難しく、また川崎短大は傘下機関への就職者も多い。しかし所在する倉敷市の地域貢献を特色として打ち出せる可能性は十分にある。したがって、より倉敷市を身近に、地域に親しみをもつ、もたれる教育はその強化になると考えられた。その点で旭川大学がおこなっている「地域住民や地域組織の支援を受け、臨地実習前から看護対象者と関わる教育」は参考になると思われた。

また、旭川大学では、ちょうどアクティブラーニング室が整備され、そのシステムを活用して看護学の授業を始めた教員がいたため、川崎短大でも行われていたグループワークの進化ツール案の紹介として研修テーマに取り入れた。他、両学の教育の取り組みや当日の参加者の関心領域も考慮して、スピリチュアルケアや、臨床指導者の役割の違いを学ぶ研修テーマを組むことにした。

## 2) 研修会の開催準備

企画の発端は川崎短大から出たものだったが、3校の特徴を知る者が旭川大学にいたことから、研修テーマの絞り込みやフライヤーの作成は旭川大学が中心となって進めた。一方、開催地は川崎短大で、参加者の大半が川崎短大関係者となることから、研究生や川崎短大の講演者への講演内容や連絡調整、研修会開催の広報、会場手配、メディア機器準備は川崎短大が行った。

## 2. 研修会の実際

### 1) 日本の介護保険制度は中国の啓蒙に対して （上海健康医学院看護実習中心 劉睿）

日本の介護保険制度についての報告があった。また人口政策（一人っ子）を行ってきた中国は、現在高齢化率15%と、少子とともに急速な高齢化になっている。この背景から介護問題への対応として介護保険導入を考えている。中国の介護職は体力の関係から重労働職後の40歳以降の者が就くことが多く、専門職教育に課題がある。老人介護サービスの研究センター設立を目指したい。また日本の高齢者へのやさしい心遣いは中国ではまだ不十分であるとの報告があった。

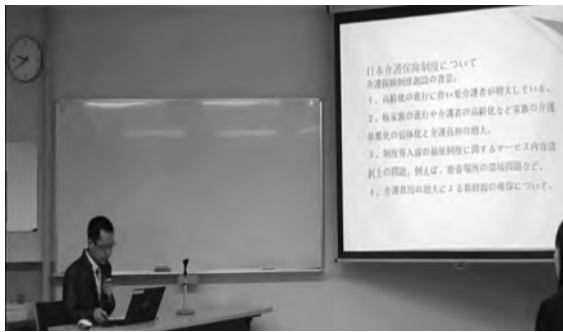


写真1 劉睿氏 報告

2) 川崎医療短期大学と上海健康医学院の看護科における成人看護外科教育の比較  
(上海健康医学院成人看護外科研究室 王黎)

日本の看護基礎教育の特徴は、テキストのビジュアル化と知識面の詳細記述で、知識の記憶中心の上海と異なる。また、日本では患者一人ひとりと患者理解を含め、丁寧に向き合う実習が特徴的で、治療処置だけでなく日常生活援助も看護上重視されており、実習でも大きなウエイトを占めている。上海では学内授業は教員、臨地実習は看護師、と指導担当が別れ、病院実習の評価も看護師が行うが、日本では実習指導や評価とも教員が関わる。500名の学生が40箇所以上の実習先に行く上海健康医学院の実習生は、学生と病院は面接試験で選び決定する。



写真2 王黎氏 報告

3) 高度先進救命医療と看護をつなぐ～プレホスピタルからインホスピタルの対応統一を目的とした川崎学園内の取り組み～

(川崎医療短期大学看護科 井上千穂)

日本で最初にドクターヘリを導入するなど救急医療を先駆的に行ってきた経緯から、現在はその教育機関としての機能を持つ。子どもを失った母の思いの語りのシーンを教材として用いるといった情意と、様々な現場状況に沿ったシミュレーション場面

で考えるとといった実践との両面から真摯に技能を身に付ける教育を行っている。ICLS (Immediate Cardiac Life Support : 医療従事者蘇生トレーニングコース) の普及に向けた動機づけとして技能に応じたバッジやポロシャツの活用をしている。医療職に限らず、次第に学生、病院の売店職員など技能資格者が増え、プレホスピタル対応者が充実しつつある。災害対応では情報の錯綜が課題で、福知山線の列車事故ではビル内に一車両丸ごと入ってしまっていることが映像では分からなかったり、医療スタッフと電車を挟んだ反対側で多くの負傷者がいたことに気づけなかったりした反省からインターネットワーク活用が進んだ。災害は現場毎に状況が異なるので、情報錯綜の問題は簡単には解決しないが、今後も災害毎での経験から情報網の改善に繋げる必要はある。ADLS (Advanced Disaster Life Support) : 米国災害医療標準教育プログラムプロバイダーコース、日本で試験を受けられる川大病院のみの英語による試験は、普及を考えると日本語による試験が打開策の一つではないかという提案が発表後の質疑応答の中で出た。



写真3 ドクターヘリ

4) 地域住民と学生をつなぐ

(1) 地域に出て学ぶ学生

(旭川大学保健福祉学部保健看護学科 中川初恵)

2～3年次の老年看護学の授業において、大学周辺で合唱サークル活動を行っている高齢者団体の協力を得て、学内で合唱を披露したり、曲に合わせた健康体操を考える授業を通して元気高齢者を理解したり、グループホームに赴き、認知症高齢者との関わり方を学んでいる。また一部の学生は、同好会活動を通じて地域高齢者と交流し、自身の活動の効果を測定したり、今後の課題を見出したりしている。一方、高齢者にも協力を得るために、高齢者大学での講座を通じて、学生との交

流の意義を説くとともに協力への呼びかけを行っていることを紹介した。

## (2) 大学で地域の先生から学ぶ学生

(旭川大学保健福祉学部保健看護学科 羽原美奈子)

本報告では、在宅の場、訪問看護の対象としても多い難病患者と旭川大学学生との交流をテーマに報告した。日頃旭川大学の看護学生は、地域で行われる難病連（難病患者と家族の会）クリスマスパーティーや保健相談会、音楽療法の会などに学生ボランティアとして随時参加し学習させていただいている。学生がこのように自ら地域に向かう一方で、逆に、患者・御家族の皆様にも地域の講師、地域の先生として大学に来てもらい、家族看護学科目の中で話をしてもらっている。学生は患者や家族の生の声から、看護支援に必要なことからや家族の希望、想いなど貴重な学びを得ている。その地域での交流や学習成果について報告を行った。

## 5) スピリチュアルケアと学生をつなぐ

(旭川大学短期大学部幼児教育学科 出村由利子)

北海道の長く厳しい冬一大地に育てられた精神や人間愛を追求した旭川出身の作家三浦綾子を紹介しつつ、授業内の体験演習から、頭で考えるのではなく、マッサージや音楽を通して無心一心地よさを体感して得られたスピリチュアルケアのヒントを紹介した。

## 6) アクティブラーニングコモンズで紙上患者と学生をつなぐ

(旭川大学保健福祉学部保健看護学科 大谷順子)

上級生有志が作成した紙上事例のロールプレイVTR視聴やアクティブラーニングコモンズを活用する授業では、8割から9割の学生が、この疾患の特徴や肺炎・脱水の治療・振戦や固縮のある対象者の援助について理解したとのアンケート結果を得た。グループワークプロセスでは「問いが創出」され学びを発表行動に結びつけることができ、グループ課題発表と同時に賞賛や理解できたという学生のリアクション映像が映し出されることから、学生の好奇心を刺激し、看護過程の課題に主体的に取り組むことを促した。学生の言葉から「解るたのしさ」をもたらした等の成果を生んだ。一方、課題として教員は機器の扱いを研鑽する必要がある等を動画や

画像を見てもらいながら報告した。発表後の質疑として「後輩のためにロールプレイVTRに学生が登場しているのはどのような経緯からか？」があった。授業でのロールプレイが優れていたことを褒めた学生達を中心に、誰かの役に立つことを喜びとする学生が多いことを報告した。

## 7) 看護教育機関と臨床をつなぐ

(旭川大学保健福祉学部保健看護学科 中川初恵)

新人看護師のプリセプター担当を経験した看護学校卒業後5年目以降の看護師が各病棟複数名で臨床指導者として従事している病院の臨地実習方法を紹介した。実習生との関係作りとして指導者の顔写真や実習受け入れに対するメッセージの入ったウェルカムボードを作成していること、病棟オリエンテーションを指導者が行うことは、互いに学内使用物品との差異を知り、「学生さん」ではなく「〇〇さん」と学生の個性が認識できること、患者への初対面の挨拶では、患者との関わり方のモデルを学べること、またこうした指導者と学生の関わり後に教員から学生の個別状況を聞くことは指導者にとっても学生像を描き、学生個々の状況に合わせた指導を行いやすくさせていること、複数の看護師で学生指導を検討し合いながら指導の修正ができることを報告した。

## 8) 看護教育と世界をつなぐ～川崎医療短期大学と上海健康医学院国際交流～

(川崎医療短期大学看護科 登喜玲子)

川崎短大が所属する学校法人川崎学園と中国との交流は、1956年の毛沢東主席、周恩来総理との接見に遡る。戦時中中国に迷惑をかけたことに報いるため、川崎学園の医療教育を通じた交流が始まった。川崎短大での留学生受け入れは1980年から始まり、



写真4 川崎医療短期大学 登喜玲子氏

1996年から上海職工医学院（現：上海健康医学院）の研究生を、1999年から上海市衛生学校卒業生を看護科と同じカリキュラムで2～3名／年受け入れており、卒業生は30名を超えた。留学生の感想では、人を尊重し個別性を重視した看護、診療の補助より療養上の世話が重視されていること、看護過程を通じた計画の実践と責任、チーム医療と在宅看護の良さの印象が強い。また同年より川崎短大の代表学生で上海への訪問研修が始まり、両国の生活や文化の理解を進めている。文化の違いはあっても良い看護をしたいという思いは同じであることが実感できる。

### 9) 川崎医科大学現代医学教育博物館の地域貢献

（川崎医科大学現代医学博物館 中村信彦）

多くの医学博物館が歴史を紹介する傾向にあるが、この博物館は最新医療情報を発信しているのが特徴である。初代理事長（川崎祐宣）の「百聞は一見に如かず、百読は一見に如かず」のコンセプトのもと、集積した知識の地域還元施設でもある。館内は子供から医学生までが学べ、全ての展示からシミュレーター機器に至るまで館内職員が作成する。



写真5 川崎医科大学現代医学博物館 標本模型オブジェ

### 10) 川崎医科大学附属病院及び臨床教育センターの取り組み

（川崎医科大学附属病院 坂東多恵子, 丸橋民子）

ベッドコントロールセンターのスタッフに看護師が所属することは、医療知識や入院患者の経過予測から空床ベッドの確保ができる。またそのための各病棟棟長が集う朝の5～10分のミーティングは、空床状況だけではなく、重症患者の状況なども報告し、病棟間の状況を知り合う風通しの良さがある。このことにより、緊急入院時の他科患者の受け入れ

先の判断や支援体制が築かれる。臨床教育研修センタースキルス・ラボでは、病室やナースステーションなど、環境と看護技術を疑似体験しながら研修できるよう整えられていた。



写真6 川崎医科大学附属病院臨床教育研修センター 研修室内

### 3. 研修会の成果

本学当科では留学生の受け入れはしていないため、川崎短大における研究生の学びの成果を聞くことは新鮮で興味深かった。研究生の報告から、中国で急速に進む高齢化の中で、社会的な支援の構築が急務になっており、日本の介護保険制度の有用性や課題の情報提供が、今後の中国での高齢者の生活支援に有用であることが共有された。また、介護職に肉体労働経験者を起用していることは、日本の介護職層との違いであり、更に介護内容の違いを知る必要があると思われる。看護教育については、日本の看護が人と人の生活の個別性に沿った援助を重要視しており、丁寧に看護対象者の情報を収集し、分析している特徴があること、国際的視野を広げることが、ただの看護の画一化に至らないために、日本にしかできない看護や看護教育のあり方を発信し続けることが必要であることを再確認できた。

研究生は語学の壁、文化による留学の困難があったに違いなく、それを乗り越えての報告と思われる。また、異国の地での生活に慣れるために、川崎短大の教

員も多くのフォローを行い、この日の発表を迎えた。以前、川崎短大の卒業生で、国際看護学を研究している近藤麻理氏の記事に「海外で1か月暮らすと1年分の価値がある」<sup>3)</sup>とあった。海外での活動に向いているのは、精神的に自立している人、一人で旅ができる人と言われるが、言語や文化の違いから様々な誤解やすれ違いは避けられず、支える人がいなければ難しい。留学する人も受け入れる人も国際感覚を磨くことができる。国際的な視野を養うことは日本にいても可能であると改めて感じられた。

次に、日本で最初にドクターヘリを導入した川大病院を傘下にもつ川崎学園は、救急看護の実践だけでなくフライトナースや救急看護師の教育機関としての役割も担っている。講演いただいた井上千穂氏は、川崎短大の卒業生でもあり、災害看護など、看護教員であるとともに看護師としても活躍している。リアルな看護を教授できることは、看護学生への教育還元としても大きい。当科は、実習指導以外の看護職実務は少なく、学内専従活動が多いので、この点は今後の看護教員のあり方として参考になった。

逆に本学からの話題提供においては、川崎短大は、当科のように学内授業の中で地域住民参画がなく、地域住民との連携過程の構築等に関する質問を受けた。主な臨地実習先の一つである川大病院では、これまで師長や主任といった看護管理職が実習指導者であったが、現在看護師が担う役割へのシフトを検討しており、当科実習病院における臨床指導者の役割や活動内容に対する関心も高かった。

医学博物館は、リアルな標本臓器から見て触れられたり、体験型クイズを通して学んだり、医学生から多様な世代の一般来場者にまで対応できる多様性があった。各臓器の大きさ等は医療従事者でもあまり認識していない点があると思われ、遠距離ではあるが本学の学生にも学ぶ機会があればと思える展示内容だった。本学では北辰会館等でゼミや研究成果が展示されているが、一般公開色は薄いところがあるので、地域住民への知の還元としての大学の機能を考える機会となった。

川大病院見学では、岡山ネットという病院同士のネットで地域連携が考えられていた。倉敷市は、介護連携バスなど顔が見える関係がつくられ多職種連携できていると聞き、大変学習になった。課題としては、各々の情報ツールの書式が統一されておらず、バラバラであるのでそれを統一したい、とのことであったので、種類の書式設定は、連携を見越して統一書式を準備

する必要がある。

臨床教育研修センタースキルス・ラボは、医療スタッフや臨地実習をする看護学生の教育だけではなく、就職活動として見学に来る学生にとっても入職後の研修を想起させるものであり、特に技術に不安のある学生の不安軽減に役立つものと思われ、関西方面への就職希望があれば紹介したいと感じた。

#### 4. 研修会の今後の展望

研究生の報告は、日本の看護教育の特徴を再確認する機会になったが、経年的にみると同様の印象に留まっている課題がある。この背景には、先の研究生による引き継ぎや、留学後の母校での教育活用の試み後に見出した更なる課題を持つての後輩留学にまでは至っていないためではないかと思われた。したがって、国際交流のプログラムには、誰もが共有すべき内容と、経年的に問題に取り組むプロジェクトとの併用で進め、交流国双方の看護や看護教育に寄与する構造を持つ必要があり、看護学生間、看護教員間の国際交流開始時には留意したい。また丁寧な印象の日本の看護も社会保障費が膨らむ高齢社会にあっては、対費用効果は無視できない。ここには両国の家族意識やサポートに対する考え方が違う点も影響すると思われ、こうした点についての着目も意義深いと考える。

地域の力を実習前の看護対象者に触れる機会として成果とともに紹介したが、理論的な理解にとどまった感がある。学生と地域住民の交流授業風景や学習後の語りなど、学習者が感じた生の声を届けることでより理解を促す必要がある。一方、リアルな看護現場の声を伝えるには、看護実務者の教員活動をどう支援していくかも課題である。これは、看護スタッフが臨床指導者として看護教育に当たる場合も同様で、川崎短大の実習先で今後新たな臨床指導者体制が導入される際には、情報交換しながら調整できればと思う。

他にも、当科は、看護過程の整備、教員の離職など、様々な課題があり、また川崎短大では、地域と共存する大学や教育のあり方について検討の余地がある。今後も両学の成長を促進したい点を情報交換しながらより良い大学に向け、互いに学び合い、大学の特色として生かしていければと思う。また、研修会は共催であったが、本稿は旭川大学からみた研修会の成果や気づきを中心に述べた。今後は双方の振り返りにより、更に考察を深め、今後の研修や大学間交流のあり方を検討したい。

今回の研修会を通して見えてきたことは、世界と地

方、ある地域と別の地域など、一見異なって見える領域は密接に関連しているということだった。こと地方は「先端から取り残された」「いつまでも昔のまま」と否定的な評価をされることが少なくない。しかし川崎短大の留学研究生育成や ICLS、本学の地域住民との交流授業や ICT 活用、スピリチュアルケア等その地域で育んできたものだからこそ、興味深く互いにうけとめられるものであった。これは双方の大学が持つ強みであると確認することができた。今後もこうした学び合いを通して広く多様な見識を所属地域や機関に合わせて活用し続けたい。

## おわりに

本研修の企画から本報告の内容確認に至るまでご尽力いただいた川崎医療短期大学の登喜玲子主任、研修の趣旨をご理解いただきご講演いただいた井上千穂先

生、上海健康医学院の劉睿先生、王黎先生をはじめ、川崎医療短期大学看護科教員の皆様、川崎医科大学現代医学教育博物館、川崎医科大学附属病院看護部の皆様に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 文部科学省：国公立大学を通じた大学教育再生の戦略的推進 1. 大学教育再生の戦略的推進 (2) 革新的・先導的教育研究プログラムの開発促進 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+), [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/renkei/](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/renkei/) (2016年12月25日閲覧).
- 2) 文部科学省：国公立大学を通じた大学教育再生の戦略的推進 1. 大学教育再生の戦略的推進 (2) 革新的・先導的教育研究プログラムの開発促進 大学間推進事業, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/renkei/](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/renkei/) (2016年12月25日閲覧).
- 3) 近藤麻理：国際的視野を持って行動すること 国際看護学の確立に向けて、看護教育, 50 (1), 16-22, 2009.